

人の役に立つために、
自分を高める「自利利他」の精神

清風学園 対談 シリーズ

清風中学校・高等学校(大阪市天王寺区)は、仏教に基づく独自の人格教育を推進し、「文武両道」で知られる中高一貫の私立男子校です。校祖の系譜を継ぎ、チベットの仏教に精通する平岡宏一校長と、仏教に造詣が深い評論家の宮崎哲弥さんが対談。仏教が教育に果たす役割と、次代を担う若者への期待を語り合いました。その模様を3回に分けて紹介します。

—現代の10代の若者の印象は

平岡 私は大いに期待感を持っています。今の子どもは頭ごなしに言っても聞きませんが、「なぜ、それをやる必要があるのか」が腑に落ちれば、しんどいことにもついてくるし、伸びていきます。大人がちゃんと子どもと向き合っていないことが問題です。



宮崎 私も大学などで若者を身近に見ていますが、「人情の機微を理解しない」とか「知的関心が薄い」という若者評は、全く当てはまらないですね。彼らは合理的なので、「何のためにやるのか分らないことを、やるのはいや」なだけなのです。だから手段と結果の脈絡がはつきりしない限り動かない。逆に、そこを得心すれば、昔の若者以上に能力を発揮する場面を私は何度も見えました。

—仏教が教育に果たす役割とは

平岡 どんな宗教でも、人の役に立つ「利他」が基本になっています。本校は仏教に基づく人

格教育を掲げ、その根幹をなす「自利利他」は、自分を高めて人のお役に立とうとする心のありようを表しています。誰もが本来持っている「人の役に立ちたい」という善性を明確に意識させ、学びの動機につなげるのが教育における宗教の大きな役割です。

宮崎 かつて日本は共同体意識が強く、例えば「イエのため」という前提が社会の隅々にまで組み込まれ、個の倫理が問われることはあまりなかった。しかし共同性が弱まった今こそ、私は仏教の教育力が発揮されると期待しています。仏教の起点は、まさに個であるからです。社会を変えるのも、自分を変えるのも自分自身なのだ、という仏教の考え方は、合理的な若い人々の共感を得るでしょう。

—「文武両道」や高い進学実績は、仏教教育の成果でしょうか

平岡 本校がめざすのは、一貫して「人のお役に立つ」人物の育成です。オリンピックをはじめ、インターハイに数多く出場する運動系クラブや、発明、研究等で受賞を重ねる文化系クラブの活躍も、本校の教育の具現化に他なりません。難関大学への進学実績の高さは胸を張れるが、保護者には、こうした目に見える実績よりもまず、教育方針をご説明し、賛同いただくようにしています。

宮崎 私は仏教に、長期的なスパンで規範意識を涵養する可能性を感じます。仏教はあらかじめ善悪を設定せず、自分の行為がもたらした結果から、「こうあるべきだ」という規範を自己探索させる側面があるからです。外部から押し付けられた規範はもろく、はがれ落ちやすいが、自分でつかみとったものは強い。仏教は、そういう教育力を内在していると思うのです。Ⅱ第2回は22日に掲載(予定)Ⅱ



ひらおか・こういち 1961年大阪市生まれ。早稲田大学第一文学部卒。高野山大学大学院博士課程単位取得。チベット仏教を学ぶため、2年間インドに留学した。清風中学校・高等学校で、社会科教師、副校長を経て、2011年から現職。

宗教観に基づく人格教育の可能性 ～仏教の思想、そして教育の未来を考える～

対談 宮崎 哲弥 × 平岡 宏一 第1回
評論家 清風中学校・高等学校校長



みやざき・てつや 1962年福岡県生まれ。慶応義塾大学文学部卒。政治哲学からサブカルチャーまで幅広く精通し、読売テレビ系「たかじんのそこまで言って委員会」をはじめ、コメンテーターとしても活躍。「仏教教理問答」「知的唯仏論」など、仏教に関する著書も多い。

社会を変えるのも、
自分を変えるのも「自分自身」です